**2019年1月14～15日**

**梅原猛死去**

**梅原猛さん死去＝哲学者、独自の「日本学」－９３歳**

時事通信 2019年01月14日09時36分

梅原猛さん（２０１３年）

古代史の大胆な仮説を提唱するなど、独自の視座から幅広く日本文化を論じた哲学者で文化勲章受章者の梅原猛（うめはら・たけし）さんが１２日午後４時３５分、肺炎のため京都市内の自宅で死去した。９３歳だった。葬儀は近親者で行い、後日しのぶ会を開く予定。喪主は長男で京都造形芸術大教授の賢一郎（けんいちろう）さん。

「京都の貴重な宝」惜しむ＝瀬戸内寂聴さんが談話－梅原猛さん死去

仙台市生まれ。旧制第八高等学校（現名古屋大）を経て、１９４８年京都大文学部哲学科卒。大学教員の道を進み、立命館大教授、京都市立芸術大教授、同大学長を歴任した。

西洋哲学から日本文化論に転じ、古代史や仏教を中心に、既存学問の枠を超えた幅広い視点から研究。法隆寺を聖徳太子一族の怨霊鎮魂の寺とする「隠された十字架－法隆寺論」（７２年刊）、万葉歌人の柿本人麻呂の刑死説を唱えた「水底の歌－柿本人麿論」（７３年刊）など数々の著作を発表。縄文から近代までを視野に収めた独創的な論考は「梅原日本学」と呼ばれ、通説を覆す大胆な論は学界の枠を超え、大きな反響を呼んだ。

文化勲章を受章し、談笑しながら記念撮影に向かう梅原猛さん（右）と法学者の伊藤正己さん＝１９９９年１１月、皇居

「地獄の思想」（６７年刊）以降、法然や親鸞らにまつわる仏教関連の著述も多い。国際日本文化研究センター（京都市）の設立に尽力し、８７年から９５年まで初代所長を務めた。近年は自然と共存する文明への回帰を見据えた「人類哲学」にも取り組み、出雲神話の成立に関するかつての自説を見直した「葬られた王朝－古代出雲の謎を解く」（２０１０年刊）が話題を呼んだ。

現代風に演出したスーパー歌舞伎の第１作「ヤマトタケル」（１９８６年初演）の台本を書き下ろすなど、伝統芸能の世界にも新風を吹き込んだ。９７年から６年間、日本ペンクラブ会長。「脳死」段階での臓器移植や原子力発電に批判的立場を取り、護憲派を結集した「九条の会」の呼びかけ人にも大江健三郎さん、瀬戸内寂聴さんらと共に加わった。東日本大震災後に発足した政府の復興構想会議には特別顧問として参加した。

９２年文化功労者。９９年文化勲章受章。

梅原さんの自宅では１４日朝、長男の賢一郎さんが取材に応じ、「父は哲学者として大往生しました」と淡々と話した。

**哲学者の梅原猛さんが死去　独特の史観確立**

共同通信 1/14(月) 2:06 配信

梅原猛さん

戦後日本を代表する哲学者で国際日本文化研究センター初代所長を務めた梅原猛（うめはら・たけし）さんが12日死去したことが14日、関係者への取材で分かった。93歳。仙台市出身。

哲学や歴史、文学など幅広い分野で著作を発表、「梅原日本学」とも呼ばれる独自の史観を確立した。1972年に発表した「隠された十字架　法隆寺論」では聖徳太子怨霊説を唱え、大きな反響を呼んだ。

歌舞伎のために「ヤマトタケル」を書き下ろすなど、創作の分野でも活躍。脳死臨調のメンバーも務めた。

国際日本文化研究センターの設立に尽力し、87年の発足時から95年まで所長。99年、文化勲章受章。

**哲学者の梅原猛さん死去　日本古代史に大胆な仮説を展開**

朝日新聞デジタル 1/14(月) 1:11 配信

梅原猛さん

独自の理論で日本古代史に大胆な仮説を展開した哲学者で、国際日本文化研究センター（日文研、京都市西京区）の初代所長を務めた文化勲章受章者の梅原猛（うめはら・たけし）さんが１２日、死去した。９３歳だった。

１９２５年、仙台市生まれ。京都大学哲学科卒業後、立命館大学教授や京都市立芸術大学長などを歴任した。

６０年代から日本文化研究に傾倒し、７２年に奈良・法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮めるために建てられたとする「隠された十字架―法隆寺論」を出すと、７３年には万葉歌人の柿本人麻呂は流刑死したとする「水底（みなそこ）の歌―柿本人麿論」を刊行。

通説を覆す独創的な論は「梅原古代学」と呼ばれ、大きな反響を呼んだ。
８０年代前半には、日本文化を総合的に研究する中心機関の必要性を訴え、当時の中曽根康弘首相に直談判するなど政府関係者を説得。日文研の創設にこぎ着け、８７年に初代所長に就任した。
社会的発言も多く、日本人の死生観をもとに「脳死」の考え方に強く反対したほか、イラク戦争や自衛隊の海外派遣の反対、平和憲法擁護なども訴えた。一方で、スーパー歌舞伎「ヤマトタケル」の創作など劇作家としても活動し、多才ぶりを示した。
９９年に文化勲章受章。９７年から日本ペンクラブ会長を３期６年務めた。２００４年には「九条の会」呼びかけ人となり、１１年には東日本大震災復興構想会議の特別顧問となった。

**「長い疑いの末に直観的に…」　梅原猛さんが語った言葉**
朝日新聞デジタル 1/14(月) 1:24 配信

国際日本文化研究センター顧問の梅原猛さん＝１９９５年１２月、東京　(梅原猛さんの語録)
「２１世紀にはこの科学技術の信仰に対する厳しい批判が起こるに違いない。脳死を人の死とする今回の衆院の決定は、科学技術万能思想に対する人類の英知の闘いの外堀を埋めることになると思う」（１９９７年、朝日新聞への寄稿で）
「美なるもの、真なるものを求め続けるのが哲学者の精神」「デカルトからは通説を疑うことを学んだ。長い疑いの末に直観的に仮説が生まれる。ニーチェからは心の奥深い闇を見つめることを学んだ」（２０１３年、京都市での講演で）

**梅原猛さん、歴史・宗教・文学…　哲学にとどまらぬ視野**
朝日新聞デジタル 1/14(月) 1:38 配信

梅原猛さんの歩み

立命館大で講演する梅原猛さん＝２０１３年７月、京都市中京区
「デカルトの『方法序説』によって私は学問の方法を学んだ。学問にはまず『疑い』がある。その疑いは、それまでの通説に対する深い疑いである。そのような長い疑いの末、直観的に一つの仮説を思いつく」
１２日に９３歳で亡くなった梅原猛さんは米寿（８８歳）の時の講演で、こう述べた。自らを哲学者と呼び、「すべてを疑い、権威に対して戦うことが哲学者の任務」と公言した。
奈良・法隆寺は聖徳太子一族の怨霊を鎮める寺だと説いた「隠された十字架」（１９７２年）、柿本人麻呂は刑死したと主張した「水底（みなそこ）の歌―柿本人麿論」（７３年）などは、まさに従来の常識や通説を疑い、覆すもので、代表的な著作となった。だが、たとえば怨霊という実証不可能なものに基づいて論じていく方法は、専門家からの批判、反論を盛んに浴びた。
縄文論では、縄文文化が「日本固有のものでアイヌ文化と共通する」とした。日本文化を稲作とその上に成立した権威体制ととらえる従来説に対する革命的な論と評価される一方、文化の歴史的変遷を無視した「危険な日本賛美論」とする批判もあった。
学者としての実証性の物足りなさを批判する声はあったが、それを差し引いても余りある独自の構想力は、多くの読者を獲得した。歴史、宗教、文学、美術などの領域を超えた視野の広さは、非常に専門化した学者ばかりが目立つ中、貴重な存在だった。

**＜評伝＞権威と戦い続けた哲学者　独創性、通説疑う　梅原猛**

さん死去
朝日新聞デジタル 2019 年 1 月 14 日 05 時 00 分

米寿記念の特別講演をする梅原猛さん＝２０１３年５月、京都市西京区の国際日本文化研究センター

「デカルトの『方法序説』によって私は学問の方法を学んだ。学問にはまず『疑い』がある。その疑いは、それまでの通説に対する深い疑いである。そのような長い疑いの末、直観的に一つの仮説を思いつく」

１２日に９３歳で亡くなった梅原猛さんは米寿（８８歳）の時の講演で、こう述べた。自らを哲学者と呼び、「すべてを疑い、権威に対して戦うことが哲学者の任務」と公言した。

奈良・法隆寺は聖徳太子一族の怨霊を鎮める寺だと説いた「隠された十字架」（１９７２年）、柿本人麻呂は刑死したと主張した「水底（みなそこ）の歌―柿本人麿論」（７３年）などは、まさに従来の常識や通説を疑い、覆すもので、代表的な著作となった。だが、たとえば怨霊という実証不可能なものに基づいて論じていく方法は、専門家からの批判、反論を盛んに浴びた。

縄文論では、縄文文化が「日本固有のものでアイヌ文化と共通する」とした。日本文化を稲作とその上に成立した権威体制ととらえる従来説に対する革命的な論と評価される一方、文化の歴史的変遷を無視した「危険な日本賛美論」とする批判もあった。

学者としての実証性の物足りなさを批判する声はあったが、それを差し引いても余りある独自の構想力は、多くの読者を獲得した。歴史、宗教、文学、美術などの領域を超えた視野の広さは、非常に専門化した学者ばかりが目立つ中、貴重な存在だった。

劇作家としても才能を発揮した。三代目市川猿之助（二代目市川猿翁）と生み出したスーパー歌舞伎「ヤマトタケル」、大蔵流狂言の茂山千之丞との「王様と恐竜」などのスーパー狂言、梅若玄祥の演出によるスーパー能「世阿弥」などを創作し、話題を呼んだ。

「日本文化を学際的、総合的に研究する中心機関が必要だ」として、国際日本文化研究センター（京都市西京区）の設立にも力を尽くした。当時の中曽根康弘首相に直接働きかけたことが「国家主義的な機関だ」などの批判を受けたが、「ことを成すには権力と近づくことも辞せず」として枠にはまらないユニークな研究者を集め、日本文化研究を世界に開く機関に育てた功績は大きい。

晩年は「九条の会」の呼びかけ人となったほか、東日本大震災による原発事故を「文明災」と呼んで批判し、自然と科学が共存する「人類哲学」を提唱するなど、社会や平和の問題に積極的に発言。知識人が沈黙しがちな風潮の中で、反体制的ともいえる姿勢を貫いた哲学者だった。（大村治郎）

**哲学者・古代史研究、梅原猛さん死去…９３歳**
読売新聞 1/14(月) 2:18 配信

梅原猛さん

古代史の通説に大胆な発想で切り込んだ、文化勲章受章者で哲学者の梅原猛（うめはら・たけし）氏が１２日、亡くなったことが１３日、分かった。９３歳だった。

仙台市生まれ。愛知県で育ち、旧制八高（現名古屋大）を経て京都大文学部哲学科を卒業、立命館大教授や京都市立芸術大学長などを歴任した。国際日本文化研究センターの創設を政府に働きかけて１９８７年、初代所長に就任した。

哲学を足場に仏教、古代学、芸術、文明論へと視野を広げた。聖徳太子の霊を鎮める場所との視点で法隆寺を論じた「隠された十字架」（７２年）、柿本人麻呂は山陰沖の島で最期を迎えたとする「水底の歌」（７３年）など独創的な著作で、反響を呼んだ。「ヤマトタケル」（８６年）などのスーパー歌舞伎、「ムツゴロウ」（２０００年）などのスーパー狂言の台本を執筆、新作能「河勝」（０８年）も創作した。

**梅原猛さん死去　イデオロギーを嫌い、学問を愛した人生**
毎日新聞 / 2019 年 1 月 14 日 7 時 14 分

特別講演を終え、花束を手にする梅原猛・国際日本文化研究センター顧問（右から２人目）＝京都市西京区の同センターで 2013 年 5 月 22 日、竹内紀臣撮影

哲学者の枠にとどまらない、膨大な日本文化の集積から、独自の「梅原日本学」を築いた梅原猛さんが亡くなった。イデオロギーを嫌い、学問を愛した人生だった。

哲学との出合いは旧制八高（現名古屋大）時代。ハイデガーやニーチェへの理解を深める傍ら、西田幾多郎、田辺元、和辻哲郎ら京都学派に興味を持ち、京大哲学科に進む。死を見据えたうえで存在とは何かを考える立場の礎には、名古屋大空襲や徴兵など、自身の苦い経験があった。

日本文化への探求を深め、広げていった。「今までの日本研究は総合的な視野が欠けていた。『日本のことなんかやるのは反動だ』と左寄りの批判があった」。学生運動が盛り上がった時代の世相には距離を置きつつ、権力者に対する舌鋒（ぜっぽう）は鋭

かった。国際日本文化研究センター（京都市西京区）創設にあたり、中曽根康弘首相（当時）に恩義を感じながらも「私と中曽根さんとは政治的信条を異にしている。憲法改正に私は反対。この日文研では政治が文化に奉仕している」と誇った。「美しい国」を掲げた安倍晋三首相に対しては「確かに日本は美しい。しかし美しい日本人とは？　東条英機ですか？　小泉純一郎？　そうではない。菅原道真であり、世阿弥であり、千利休だ。彼らはみな権力に抹殺された」。2004年には「九条の会」設立呼びかけ人の一人にも名を連ねた。

ユーモアに満ちた言説で知られ、07年の同センター設立20周年の記念あいさつでは「若いときは（柿本）人麻呂や聖徳太子の霊が乗り移っていろんな本を書いたんですが、ただ今、世阿弥の霊が乗り移った」と笑わせた。また「80になってやっと本当に学問が楽しくなった。100まで生きるのは無理か知らないが、生きて挑戦したい」と学問への尽きぬ思いを語った。

**哲学者の梅原猛さんが死去　93歳　文化勲章受章**

毎日新聞2019年1月14日 01時56分(最終更新 1月14日 07時11分)

梅原猛さん＝京都市左京区で2016年3月16日、三浦博之撮影

日本古代史への大胆な仮説や「森の文化」の復権を唱え、日本文化や現代文明の在り方を問い続けてきた哲学者で文化勲章受章者、国際日本文化研究センター顧問の梅原猛（うめはら・たけし）さんが12日亡くなった。93歳。

1925年仙台市生まれ。旧制八高を経て、48年京都大文学部哲学科卒。55年立命館大講師、67年同教授。69年、学園紛争の収拾策を巡り「学問、思想の自由がない」と辞職した。72年京都市立芸術大教授。74年から約9年間学長を務め、現在も名誉教授。

84年、当時の中曽根康弘首相に「日本学研究所」構想を持ち掛け、86年に大学共同利用機関の「国際日本文化研究センター」創設準備室長に就任。87年同センター発足時から95年まで初代所長を務めた。92年文化功労者。97～2003年日本ペンクラブ第13代会長。

立命館大講師時代から「笑い」に関心を持ち、大衆芸能や近代日本文学作品を通じた笑いの分析などユニークな研究を進めた。更に日本文化論や現代文明論、仏教思想、古代論へと思索を広げ、日本文化とは何かを独自の視点で問い続け「梅原古代学・日本学」と称された。

著作は大胆な仮説を展開し、一般にも広く読まれた。法隆寺は聖徳太子の怨霊（おんりょう）を弔うために作られたとする「隠された十字架　法隆寺論」で72年毎日出版文化賞。柿本人麻呂は「水死刑」で死んだとする「水底の歌　柿本人麿論」で74年大佛次郎賞。

日本文化の基層に縄文文化があると考え、アイヌや沖縄に縄文文化の原形を探った。一方、市川猿之助がスーパー歌舞伎として舞台化した戯曲「ヤマトタケル」や「オグリ」のほか、小説も手掛けるなど、創作活動も盛んだった。

脳死・臓器移植を巡る論議では、脳死臨調の委員として「脳死は人の死ではない」との意見を貫き、総理大臣の諮問機関としては異例の「少数意見」が答申に盛り込まれたが、臓器移植は容認した。環境問題にも自然保護の立場から積極的に発言し、森の大切さを訴え現代文明の在り方に警告を発した。憲法9条を擁護する「九条の会」呼びかけ人の一人でもあった。

**「9条には『超近代』の理想が含まれている」梅原猛さん語録**

毎日新聞2019年1月14日 13時41分(最終更新 1月14日 20時08分)

梅原猛さん＝京都市左京区で2015年1月13日、森園道子撮影

日本古代史への大胆な仮説や「森の文化」の復権を唱え、日本文化や現代文明の在り方を問い続けてきた哲学者で文化勲章受章者、国際日本文化研究センター顧問の梅原猛（うめはら・たけし）さんが12日、肺炎のため京都市の自宅で亡くなった。93歳。葬儀は近親者のみで15日に営む。後日、お別れの会を開く予定。

梅原猛さんの語録は以下の通り。

「脳死を死と決めつけて臓器移植をすることは著しく自然の法を曲げるものであると思う」

「移植のために太古以来の死の概念を変えようとし、それによって起こる脳死者の人権の侵害も、末期医療の放棄も、現行法との矛盾をもほとんど考慮しない」（1992年2月、毎日新聞への寄稿で）

「（九条の会の発起人に名を連ねたことについて）政治の流れがうんと右に行っているので、歯止めとして9条を守る必要があるという意思表示をしたかった。私は日本の憲法や9条には、国家絶対主義を克服する『超近代』の理想が含まれていると思う」（2004年、毎日新聞の取材に）

「（1944年12月の名古屋大空襲の経験について）私が入るはずの防空壕（ごう）に爆弾が直撃して大勢の中学生が座ったまま死にました。死骸が吹き飛ばされて屋根の鉄骨の上に引っかかっているのを見て、深く戦争を憎みました」（08年、毎日新聞の取材に）

（東京電力福島第1原発事故を受けて）「我々人類が原発なしでいかに生きていけるか、それが問われる事態になった。目をそらしてはいけない。今からでも遅くはない。むやみにエネルギーを使わない文明を考えないとあかん」（11年、毎日新聞の取材に）

「日本文化の原理は『草木国土悉皆成仏（そうもくこくどしっかいじょうぶつ）』。草も木も生きものだという人類の原初的考え方だ。人間中心の傲慢な文明が近代文明。近代哲学はその文明を基礎づけた。そんな人間中心主義を批判しないといけない。こういうことを語らねばならないと思ったのは東日本大震災後だ」（11年、毎日新聞の企画で岩村暢子さんと対談し）

「日本思想には将来の人類が必要とする原理が隠されていると考え研究を始めたが、理解するには約50年が必要だった。作家は80歳を過ぎると新しいことを書けないというが、私は90歳を過ぎても新しい研究を続けていく」（13年、愛知県碧南市での講演会で）

**梅原猛さん評伝　終戦後、死の意味を問うた哲学にのめり込む**

毎日新聞2019年1月14日 08時42分(最終更新 1月14日 20時33分)

書斎でくつろぐ哲学者の梅原猛さん＝京都市左京区で2012年6月14日、森園道子撮影

12日死去した哲学者、梅原猛さんは、単著だけで約100冊を記し、壮大な梅原日本学を構築する一方、国際日本文化研究センター（日文研）初代所長を務めるなど、戦後の京都学派最後の大物だった。気さくな人柄だったが、幼少期の家庭事情や戦争体験由来の孤独も影も宿していた。

「人影に気付くと、すぐ隠れようとする」。2012年、梅原さんは京都・東山の自宅で、小さな水槽にいるメダカをいとおしそうに見ていた。その動きに、自身の本心を見ているかのようだった。

婚外子で、旧家の養父母に育てられた。周囲の冷たい視線を浴びた。後年打ち出した大胆な仮説の源には、一…

この記事は有料記事です。

残り427文字（全文698文字）

**梅原猛さん死去　山折哲雄さん・瀬戸内寂聴さんらが談話発表**

毎日新聞2019年1月14日 13時38分(最終更新 1月14日 21時13分)

哲学者・梅原猛さん＝京都市中京区で2007年2月21日

日本古代史への大胆な仮説や「森の文化」の復権を唱え、日本文化や現代文明の在り方を問い続けてきた哲学者で文化勲章受章者、国際日本文化研究センター顧問の梅原猛（うめはら・たけし）さんが12日、肺炎のため京都市の自宅で亡くなった。93歳。葬儀は近親者のみで15日に営む。後日、お別れの会を開く予定。

宗教学者の山折哲雄さんの話

戦後日本の哲学や思想が内面的な力を失っていく中、梅原猛さんの言葉はときに激しく、ときに優しく人々の心に響き渡り、共感の輪を広げていった。その行動もまた芸術と文学の翼に乗り、ひとり天馬空を行く趣があった。その梅原さんの魂の躍動は、これからの日本人にも勇気を与え、生きる指針を指し示してくれるに違いない。

作家の瀬戸内寂聴さんの話

哲学者と自称されていたが、深い研究と独自の見識を開発していて、梅原学という魅力的な学問を発明していた。机にしがみついた学者ではなく、常に世界に目を開き、自身の学問の新しい開発に余念がなかった。

根はロマンチストで、恐妻家で、美しい聡明（そうめい）な夫人がご自慢だった。100歳まで生きて書くと言い続けていたのに、93歳で亡くなったのが惜しい。

「ヤマトタケル」など「スーパー歌舞伎」に出演した歌舞伎俳優、市川猿之助さんの話

平成最後の年に人生の幕を閉じられたことは、実に先生らしい。まさにひと時代が終わった感がいたします。先生の傍らで学ぶことを懇願した折、「君は歌舞伎界で梅原猛を生かしてくれ」との言葉が忘れられません。これから、それを実現すべく精進してまいります。

国際日本文化研究センター(日文研)所長の小松和彦さんの話

知的好奇心の塊で、それを背景にした構想力、仮説力で主に古代史を解釈してきた。スケールの大きさはまねできない。さらにその構想力は創作活動にも及び、さまざまな領域に刺激を与えてきた。私も憧れだった。

先見性もあり、世界の中の日本研究を意識して、日文研を作った。後輩の研究者たちには、独創性を伸ばせと言っていた。本人は数年前に「人類哲学序説」（岩波新書）を出して「これから本論を書く」と言っていたので残念だ。

**梅原猛さんが死去　哲学者、独自の古代史論**

日経新聞2019/1/14 8:02

独自の古代史論などで知られ幅広い分野で発言、執筆活動を続けた哲学者で文化勲章受章者の梅原猛（うめはら・たけし）さんが12日午後4時35分、肺炎のため京都市内の自宅で死去した。93歳だった。後日お別れの会を開く予定。喪主は長男、賢一郎氏。

梅原猛さん
文学・歴史・宗教の分野で従来の学説に挑んだ著作が「梅原古代学」として親しまれた。伝統芸能への造詣も深く、歌舞伎俳優の三代目市川猿之助（現・猿翁）氏と組んで「スーパー歌舞伎」の原作を、狂言役者の二世茂山千之丞氏と組んで「スーパー狂言」の原作を、能楽師の梅若実氏と組んで「スーパー能」の原作を手掛けた。
仙台市生まれ。1945年、京都大文学部哲学科入学後に学徒出陣。戦後復学し、48年に卒業した。
卒業後は立命館大教授などを経て72年に京都市立芸術大教授となり、74年同大学長。86年、国際日本文化研究センター（日文研）の創設準備室長に就任し、翌87年から8年間、日文研の初代所長。90年から92年まで臨時脳死及び臓器移植調査会（脳死臨調）委員、97年から6年間、日本ペンクラブ会長を務めた。
74年に大仏次郎賞、92年に文化功労者、99年に文化勲章。2001年5月、日本経済新聞に「私の履歴書」を掲載した。

**哲学にとどまらぬ領域、独自の文化論展開　梅原猛さん**
2019/1/14 13:37 日本経済新聞　電子版
12日死去した梅原猛さんは、大衆芸能や近代文学などを題材に話題作を発表し、親鸞や空海ら様々な人物をテーマにした著作を世に送り出した。日本の基層文化を縄文時代に見いだす独自の文化論を展開。日本人の精神構造を「縄魂弥才」（縄文の魂と弥生の技能）のキーワードで説いた。
最初に注目されたのは立命館大時代。大衆芸能や日本の近代文学作品を題材とし、笑いなどの感情を哲学的に分析しようとした。この試みは頓挫した…

**通説疑い模倣嫌う　梅原猛さん、孤立恐れぬ学問貫く**
2019/1/14 11:01 日本経済新聞　電子版
髪をかき上げ、ときに両手を上下させながら熱弁をふるう姿は迫力があった。研究者として模索していたころ、名前にひっかけて「猛犬」とやゆされた。相手が大家であろうと、信じるところを堂々と論じた。晩年になっても、「学問のためには孤立を恐れず」という姿勢は変わらなかった。
哲学の道に進んだ理由を、「人生を論理的に論ずる学問だから」と語っていた。宗教や古代史、伝統芸能と、興味の赴くままに研究対象を広げ、休む…

**哲学者の梅原猛さん死去**
産経新聞 2019年1月14日 02:24

哲学者の梅原猛さん＝２０１７年４月２４日、京都市左京区（南雲都撮影）
　日本文化や歴史・文学・宗教など多彩な分野で独創的な思索を展開、その体系は「梅原日本学」とも称された哲学者で文化勲章受章者の梅原猛（うめはら・たけし）氏が１２日、死去した。９３歳。宮城県出身。
　京都大文学部哲学科を卒業。立命館大教授、京都市立芸大教授、同学長などを経て、昭和６２年、国際日本文化研究センター初代所長に就任。後に同センター顧問を務めた。
　昭和３４年、日本の大衆芸能や文学を考察して笑いを分析した『ベルグソンの笑いの理論の批判』を発表して注目された。その後、実証主義的な古代史研究を批判し、独創的な日本文化の研究を開始。
　法隆寺が聖徳太子の怨霊を鎮魂するために建立されたとする「隠された十字架」で４７年に毎日出版文化賞を、柿本人麻呂流刑死説の「水底（みなそこ）の歌」で４９年に大仏次郎賞を受賞し、日本文化の深層に迫る「梅原日本学」を確立した。さらに日本語論、縄文文化論、仏教芸術、浮世絵など多方面にわたる思索を展開した。「写楽　仮名の悲劇」「聖徳太子」「法然の哀しみ」「ギルガメッシュ」「人類哲学序説」など著書多数。
　また歌舞伎役者の三代目市川猿之助（現猿翁）のために「古事記」を題材にした脚本「ヤマトタケル」（６１年）、小栗判官を描いた「オグリ」（平成３年）、再び「古事記」を題材にした「オオクニヌシ」（９年）を書き上げた。宙乗り・早替わりなどのケレン味や現代風な音楽を取り入れた演出は、一躍ブームとなりそれらは「スーパー歌舞伎」と称された。
　平成４年、文化功労者。１１年、文化勲章受章。１５年まで日本ペンクラブ会長を務めた。１３年には技能スペシャリストを養成する「ものつくり大学」の初代総長に就任。２３年の東日本大震災の際には、政府の復興構想会議特別顧問（名誉議長）として、震災を「文明災」と批判し、人間の自然支配の限界を説いた。

**【梅原猛さん死去】文明史観、歴史観を根底から覆した「知の巨人」**
産経新聞 2019.1.14 02:56

梅原猛さん＝２００６年１１月２４日、京都市中京区
　梅原さんの知的好奇心はとどまるところを知らず、これまでの文明史観、歴史観を根底から覆す大胆な独自の学説は「梅原日本学」と呼ばれた。国際日本文化研究センターの設立にも尽力し多くの後進も世に送り出した。
　梅原さんは、哲学者の西田幾多郎にあこがれ京大の哲学科に入学。やがて哲学から、古代史、歴史、日本研究へと関心を広げて

いく。昭和４４年、学園紛争を機に立命館大学を去ったのを機に、浪人生活を送った３年間に書き上げた論文が、梅原さんの名前を高めることになった。

それは記紀論を執筆するうえで飛鳥・奈良時代の実力者、藤原不比等（ふひと）（６５９～７２０年）を調査するうちに、芽生えた古代史への疑問だった。そこから、法隆寺建立の謎に迫る「隠された十字架」（昭和４７年）、宮廷歌人、柿本人麻呂の死の謎に迫る「水（みな）底（そこ）の歌」（４８年）が生まれた。現在では、これらは「梅原古代学」「梅原怨霊史観」として高く評価されているが、当初は研究者から批判されるなど、反響を呼んだ。

自らの研究にとどまらず、日本研究をもっと学際的に国際的にやりたいとの思いから、昭和５３年には、「日本学の真のアカデミズム」をかかげ、日本文化研究所設立構想をまとめ上げ、仏文学者の桑原武夫さん、民族学者の梅棹忠夫さんとともに設立に向けて奔走。文部省（現文部科学省）に何度も掛け合うが進展しないため、当時の中曽根康弘首相に直談判、大きく動き出す。６２年５月、国際日本文化研究センター（京都市西京区）が設立され、初代所長に就任。３期８年務め、その間、河合隼雄さん、山折哲雄さん、芳賀徹さん、井上章一さんら日本の人文科学分野を牽引（けんいん）する人物が日文研に集まった。海外からの研究者にも積極的に門戸を開き、ドナルド・キーンさんら優秀な研究者が次々と集まった。

平成２年には、政府の脳死臨調の委員に就任し、「法律が人間の死を決めるべきではない。『死とは何か』という議論が十分になされていない」と少数派として法案に反対し続けた。

また、「仏教は無用の殺生は許していない」として長崎県の諫早湾干拓や、三重県の長良川河口堰建設問題では反対を唱えた。

平成２５年５月には、米寿を記念した講演で「人類哲学序説」を出版したことに触れ、「私の尊敬する白川静先生は９６歳まで生きられた。私もまだまだ長生きして、『本論』を書きたい」と話していた。

**哲学者の梅原猛氏が死去　文化勲章受章、大胆着想で日本文化の深層解き明かす**

京都新聞 1/14(月) 1:11 配信

梅原猛氏

大胆な着想で日本文化の深層を解き明かし、「梅原日本学」と呼ばれる独創的な世界を切り開いた哲学者で文化勲章受章者の梅原猛（うめはら・たけし）氏が 12 日死去した。93 歳。

立命館大教授、京都市立芸術大教授を経て、1974 年、同大学学長に就任。大学の移転、運営に力を注いだ。87 年、学際的な日本研究の拠点として創設に尽力した国際日本文化研究センター（西京区）の初代所長に就任、後に顧問となった。

97 年には日本ペンクラブ会長に就任。大江健三郎さん、瀬戸内寂聴さんらと共に「九条の会」の呼び掛け人となり、平和や環境問題でも積極的に発言。東日本大震災を「文明災」として現代社会を批判した。がんの手術を何度も受け、脳死やクローンなど生命倫理に関する著述も多かった。伝統芸能への造詣も深く、スーパー歌舞伎「ヤマトタケル」を市川猿之助（現・猿翁）さんに書き下ろし、狂言や能も執筆して話題を呼んだ。

**梅原猛さん死去　９３歳　哲学者　独自の日本文化論**

東京新聞 2019 年 1 月 14 日 朝刊

独自の日本学を確立し、国際日本文化研究センターの初代所長や日本ペンクラブ会長を務めた哲学者で文化勲章受章者の梅原猛（うめはらたけし）さんが死去した。九十三歳。仙台市出身。葬儀・告別式は親族のみで営む。

一歳のとき母が結核で死去。愛知県内海町（現・南知多町）の父の実家で、伯父夫婦に育てられた。名古屋の旧制八高（現・名古屋大）を経て一九四五年四月、京都大哲学科へ入学したが間もなく召集され、軍隊生活を体験した。

戦後復学し、西洋哲学、特にハイデッガーやニーチェに傾倒。ニヒリズムに悩み、日本人と西洋人の笑いの背景を考察するうちに日本の宗教や文化に対する関心を深めた。六七年に仏教と日本文学の関係を論じた「地獄の思想」を刊行、ベストセラーになった。

立命館大、京都市立芸術大の教授を経て七四年、同大学長。八七年に国際日本文化研究センターが発足すると初代所長に就任した。

立命館大を退職して浪人中、藤原不比等が古事記と日本書紀の実質的な著者だ、とする「神々の流竄（るざん）」をはじめ、「隠された十字架ー法隆寺論」「水底（みなそこ）の歌ー柿本人麿論」の古代三部作を執筆した。

八六年には三代目市川猿之助（現・猿翁）さんの依頼で書いた戯曲「ヤマトタケル」を出版、スーパー歌舞伎として上演されると大ヒット。諫早湾の干拓に反対し、スーパー狂言「ムツゴロウ」の原作も書いた。

九七～二〇〇三年、日本ペンクラブ会長。九一年、中日文化賞。九九年に文化勲章を受章した。二〇〇一年、ものつくり大学の初代総長に就任。一一年の東日本大震災では、政府の要請により、特別顧問として復興構想会議に参加した。

九二年一月から二〇一七年十二月まで二十六年間、本紙文化面にエッセー「思うままに」を連載した。

著書はほかに「日本の深層」「法然の哀しみ」「葬られた王朝」

「親鸞『四つの謎』を解く」など。二期にわたり「梅原猛著作集」（各二十巻）が刊行されている。
連絡先は国際日本文化研究センター＝電０７５（３３５）２２２２＝へ。

**梅原猛さん死去　懐疑が生んだ日本学　原点に戦争体験**
東京新聞 2019 年 1 月 14 日 朝刊

梅原猛さんの原作で大ヒットしたスーパー歌舞伎「ヤマトタケル」の中に、印象深い場面がある。熊襲（くまそ）を討伐して都に戻ったヤマトタケルは、父である帝（みかど）に、すぐに東国の蝦夷を平定するよう命じられる。そして、叔母のヤマトヒメに「帝が、父上が、全く信じられなくなりました。父上は、私が早く死ぬことをお望みです」と無念の言葉を吐くのである。

このせりふには、先の大戦で召集され、特攻など無謀な作戦で多くの友人を失った作者自身の怒りが重ねられている。権威に反逆し、定説を否定することによって形成された「梅原日本学」は、理不尽な戦争体験から生まれた懐疑が原点だった。

西洋哲学から日本文化論に移った梅原さんは、あまりに宗教に無知だとして、鈴木大拙、和辻哲郎、丸山真男ら当時の権威者たちを次々に批判。それを契機に書き上げたのが「地獄の思想」であり、「神々の流竄（るざん）」「隠された十字架」「水底の歌」の古代三部作だった。

現在の法隆寺は、一族を惨殺された聖徳太子の怨霊鎮魂のために建立されたと結論づけたのが「隠された十字架」。「水底の歌」では、定説の前提になる賀茂真淵の柿本人麿論を徹底的に批判。そこには日本を破滅させた偏狭なナショナリズムにつながる国学の偏見から日本の古代学を解放しようとする強い思い入れがあった。

梅原さんはソクラテスの言葉を引いて、哲学は「愛知」の学であり、真の知識を求めてさまよい歩くことだと、よく語っていた。であるならば、哲学者が古代史や国文学の研究に打ち込んでも何も矛盾はない。

二〇一〇年には、近年の考古学の成果を踏まえて、ヤマト王朝の前にスサノオを開祖とする出雲王朝が存在したと説く「葬られた王朝」を刊行。「神々の流竄」で、出雲神話は大和に伝わった神話が、ある政治的意図によって出雲に置き換えられたもの、と論じていた自説を否定した。

「自分が築きあげた学説を否定するのは大変つらいことですが、誤りに気づいた以上は改めなければなりません」。出雲へ現地調査に向かうとき、きっぱりと話していたのを思い出す。スケールの大きな「愛知」の人であった。

（編集委員・後藤喜一）

**梅原猛さん死去　９３歳、哲学者「地獄の思想」**
中日新聞 2019/1/14 朝刊

梅原猛さん

独自の日本学を確立し、国際日本文化研究センターの初代所長や日本ペンクラブ会長を務めた哲学者で文化勲章受章者の梅原猛（うめはら・たけし）さんが死去した。九十三歳。仙台市出身。葬儀・告別式は親族のみで営む。連絡先は国際日本文化研究センター＝電０７５（３３５）２２２２＝へ。

一歳のとき母が結核で死去。愛知県内海町（現・南知多町）の父の実家で、伯父夫婦に育てられた。名古屋の旧制八高（現・名古屋大）を経て一九四五年四月、京都大哲学科へ入学したが間もなく召集され、軍隊生活を体験した。

戦後復学し、西洋哲学、特にハイデッガーやニーチェに傾倒。ニヒリズムに悩み、日本人と西洋人の笑いの背景を考察するうちに日本の宗教や文化に対する関心を深めた。六七年に仏教と日本文学の関係を論じた「地獄の思想」を刊行、ベストセラーになった。

立命館大、京都市立芸術大の教授を経て七四年、同大学長。八七年に国際日本文化研究センターが発足すると初代所長に就任した。

立命館大を退職して浪人中、藤原不比等が古事記と日本書紀の実質的な著者だ、とする「神々の流竄（るざん）」をはじめ、「隠された十字架－法隆寺論」「水底（みなそこ）の歌－柿本人麿論」の古代三部作を執筆。いずれも根底から学会の常識を覆すもので、大きな反響を呼んだ。

八六年には三代目市川猿之助（現・猿翁）さんの依頼で書いた戯曲「ヤマトタケル」を出版、スーパー歌舞伎として上演されると大ヒット。諫早湾の干拓に反対し、スーパー狂言「ムツゴロウ」の原作も書いた。

九七～二〇〇三年、日本ペンクラブ会長。九一年、中日文化賞。九九年に文化勲章を受章した。二〇〇一年、ものつくり大学の初代総長に就任。一一年の東日本大震災では、政府の要請により、特別顧問として復興構想会議に参加した。

九二年一月から二〇一七年十二月まで二十六年間、本紙文化面にエッセー「思うままに」を連載した。

著書はほかに「日本の深層」「法然の哀しみ」「葬られた王朝」「親鸞『四つの謎』を解く」など。二期にわたり「梅原猛著作集」（各二十巻）が刊行されている。

サンスポ 2019.1.14 02:47

**哲学者の梅原猛さんが死去　９３歳、独特の史観確立**

戦後日本を代表する哲学者で国際日本文化研究センター初代所長を務めた梅原猛（うめはら・たけし）さんが１２日死去したことが１４日、関係者への取材で分かった。９３歳。仙台市出身。

哲学や歴史、文学など幅広い分野で著作を発表、「梅原日本学」とも呼ばれる独自の史観を確立した。１９７２年に発表した「隠された十字架　法隆寺論」では聖徳太子怨霊説を唱え、大きな反響を呼んだ。

歌舞伎のために「ヤマトタケル」を書き下ろすなど、創作の分野でも活躍。脳死臨調のメンバーも務めた。

立命館大教授を経て京都市立芸術大教授となり、同大学長に就

任。国際日本文化研究センターの設立に尽力し、８７年の発足時から９５年まで所長。９９年、文化勲章受章。２００４年、護憲を訴える「九条の会」設立の呼び掛け人となった。日本ペンクラブ会長のほか、東日本大震災後は、政府の復興構想会議の特別顧問を務めた。

**加藤登紀子さん「梅原先生に続きの話聞きたかった」**

朝日新聞デジタル 2019 年 1 月 15 日 01 時 07 分

《親交のあった歌手、加藤登紀子さんの話》

市川猿之助さんに「歌舞伎で梅原猛生かして」悼む声続々

１９８９年、日本酒のイメージアップの貢献者に贈られる「日本酒大賞」に梅原先生が選ばれ、私が功労賞をいただいたときに初めてお会いし、それ以来、すごくかわいがっていただきました。毎年「ほろ酔いコンサート」というのを開いているのですが、「日本酒を飲む女性が増えたのは、私が日本酒ＰＲに貢献したから」と威張ったら梅原先生、すごくウケてくださって。

私の歌にはアイヌの伝記をヒントに作ったものもあるのですが、そのきっかけは、梅原先生がアイヌ文化研究で知られる藤村久和先生を紹介してくださったから。その時に、梅原先生が「あなたがアイヌの歌を覚えて歌ってくれるといいなあ」とおっしゃったので、先生からいただいたミッションだと思って、何度も藤村先生のもとに通い、記録をとって勉強しました。

最後にお会いしたのは２０１１年、東日本震災後の対談です。印象に残っているのは「民衆の中にはすばらしい知恵と道徳性が備わっているが、いまの永田町は生かせていない」という言葉。日本の文明の知恵には大切なものがたくさんある。根源的に大切なものを見つめ続けなければならない。そういうことを表情たっぷりにお話しされていたのが心に残っています。

梅原先生は書くことだけではなく、歌舞伎などの表現を続けることで、生き生きとした人間の姿を伝えようとされていたと思います。対談のとき「この年にして語るべきものが見えてきた、人類哲学の大切なことを追究して書いていく」とおっしゃっていた。もう一度お会いできたら、続きのお話を聞いてみたかった。本当に残念です。

**山折哲雄さん「底打っている今だからこそ」梅原さん悼む**

朝日新聞デジタル 2019 年 1 月 14 日 21 時 08 分

《宗教学者で、国際日本文化研究センター（日文研）で３代目の所長を務めた山折哲雄さん（８７）の話》

特集：梅原猛さん死去

出版社の編集者だったころに原稿を介して梅原さんと知り合い、４０年以上の親交があった。東北大の助教授から国立歴史民俗博物館教授になってしばらくした１９８２年９月、仙台市で東北文化に関するシンポジウムがあったとき、その後の懇親会で梅原さんが隣に来て、こう持ちかけられたのを覚えている。「日本文化を世界に発信する研究所を新しく京都につくろうと思っている。来ないか」。日文研の構想を打ち明けた上での勧誘だった。

勧誘のときも情熱的な口ぶりだったが、梅原さんは、ものにつかれたように原稿を書き、話す人だった。編集者時代に京都に行って原稿の打ち合わせをすると、終わってから祇園の居酒屋で深夜まで飲んで議論をした。飲みっぷりも豪快の一言に尽きた。

いま、人文学は様々な批判にさらされているが、底を打っている感がする。こういう時代だからこそ、梅原さんの喪失感は大きい。もう一踏ん張りしていただきたかった。

**「梅原さん、論証の苦しい作業さえ遊びに」中沢新一さん**

朝日新聞デジタル 2019 年 1 月 14 日 20 時 14 分

《梅原猛さんと共著がある人類学者・中沢新一さんの話》

梅原さんはいわば「日本のデカルト」。通説に対する深い疑いを自らの思索の足がかりにしたフランスの哲学者、デカルトを心から尊敬していた。戦前から戦後にかけ、多方面に人材を輩出した京都学派の中でも実にユニークな存在だった。

特集：梅原猛さん死去

梅原さんの肩書は「哲学者」だが、哲学そのものにとどまらず、縄文論などの日本文化論に強い関心を寄せていた。物事の本質は表面的な事実のレベルを超えて、より深いところに隠されてあるというのが梅原さんの見方だ。法隆寺が聖徳太子一族の怨霊を鎮めるための寺であるとか、柿本人麻呂は刑死したなどといった独自の歴史解釈は、歴史学者や考古学者とは違う「哲学者の目」で、目に見えない隠れたものを見抜こうとする姿勢から生まれた。

また、縄文を日本文化の基層としてとらえ直し、日本人の本質に迫ろうとしていた。梅原さんは、日本人とその文化の特性を、人類全体の思考の歴史という高い普遍の視点からとらえ、深層まで見通そうとする姿勢で探り続けていた。

子供のような好奇心をもって学問を楽しみ、論証の苦しい作業でさえ楽しい遊びに変えていた。梅原さんほど幸福で創造的な人生を歩んだ学者はいないのではないか。

「京都の貴重な宝」惜しむ＝瀬戸内寂聴さんが談話－梅原猛さん死去

時事通信 2019 年 01 月 14 日 14 時 01 分

瀬戸内寂聴さん

１２日亡くなった梅原猛さんと親交のあった作家で僧侶の瀬戸内寂聴さんは１４日、以下の追悼コメントを発表した。

梅原猛さん死去＝哲学者、独自の「日本学」－９３歳

梅原猛氏は、京都の文化面を一手に引き受ける代表者であられた。深い研究と独自の見識を開発していて、梅原学という魅力的な学問を発明していた。机にしがみついた学者ではなく、常に世界に目を開き、自身の学問の新しい開発に余念がなかった。

天性の芸術的才能にも恵まれていて、学問の傍ら、創作能やスーパー歌舞伎やスーパー狂言を制作し、興行的にも大当たりさせた。

あふれる思想を手で書くのがもどかしく、係りの編集者は、梅原氏のふきあふれる思想の言葉を、かたっぱしから書き取る能力をもとめられた。その一人が私につくづく語った。「あの人は人間じゃないですよ。喋（しゃべ）りはじめたら朗々としてつかまえる閑（ひま）がなく、その言葉を聞き取り、書くのが大変なんです。ああいう人を天才というのでしょう」

私が三つ年上なので、いつの間にか「姉さん」と呼んでいた。根はロマンチストで、恐妻家で、美しい聡明（そうめい）な夫人がご自慢だった。百まで生きて書くと言い続けていたのに、九十三歳で亡くなったのが惜しい。

京都の貴重な宝が失われたのが惜しい。（

**瀬戸内寂聴さん「京都の貴重な宝失われた」梅原氏を追悼**

朝日新聞デジタル 2019 年 1 月 14 日 18 時 44 分

日本ペンクラブ京都例会で並ぶ梅原猛さんと瀬戸内寂聴さん＝２０１６年１０月１日午後３時１８分、京都市上京区、岡田匠撮影

作家で僧侶の瀬戸内寂聴さん（９６）は、哲学者の梅原猛さんの訃報（ふほう）を受け、追悼のコメントを出した。全文は以下の通り。

特集：梅原猛さん死去

梅原猛氏は、京都の文化面を一手に引き受ける代表者であられた。御自分では、哲学者と自称されていたが、日本歴史観が日本文学観以上に、深い研究と独自の見識を開発していて、梅原学という魅力的な学問を発明していた。机にしがみついた学者ではなく、常に世界に目を開き、自身の学問の新しい開発に余念がなかった。

天性の芸術的才能にも恵まれていて、学問の傍ら、創作能やスーパー歌舞伎やスーパー狂言を制作し、興行的にも大当たりさせた。

あふれる思想を手で書くのがもどかしく、係りの編集者は、梅原氏のふきあふれる思想の言葉を、かたっぱしから書き取る能力をもとめられた。その一人が私につくづく語った。

「あの人は人間じゃないですよ。喋（しゃべ）りはじめたら朗々としてつかまえる閑（ひま）がなく、その言葉を聞き取り、書くのが大変なんです。ああいう人を天才というのでしょう」

私が三つ年上なので、いつの間にか「姉さん」と呼んでいた。根はロマンチストで、恐妻家で、美しい聡明（そうめい）な夫人がご自慢だった。百まで生きて書くと言い続けていたのに、九十三歳で亡くなったのが惜しい。

京都の貴重な宝が失われたのが惜しい。

**日本哲学「梅原氏の思想受け継ぐことでしか…」東浩紀氏**

朝日新聞デジタル 2019 年 1 月 14 日 17 時 51 分

《梅原猛さんと対談した批評家、東浩紀さんの話》

仕事とは関係なく、若い頃から梅原さんの著書を熱心に読んでいたが、東日本大震災後、初めて対談の機会をいただいた。お元気で知的活力にあふれ、笑顔も印象的だった。「健康には気を使わず、運動もしていない」と気さくに話し、４０歳以上年下のぼくにも対等に接してくださった。哲学は年齢に左右されない、何歳になっても現役で続けられる素晴らしいものなのだと非常に勇気づけられた。

特集：梅原猛さん死去

梅原さんは、極東の日本にあって、世界的課題に真っ向から向き合おうとする戦前の京都学派の野望､夢を受け継ぐ最後の一人だった。「梅原日本学」の特徴は、死者の慰霊や鎮魂といった視点から日本の歴史や宗教を解釈しようとするもので､第２次世界大戦や東日本大震災の課題にも通じるアクチュアルな問題意識だった。今後の日本哲学は、梅原さんの思想をしっかり受け継ぐことでしか展開できないと思う。

**哲学者 梅原猛さん死去 93 歳**

NHK1 月 14 日 12 時 06 分

日本古来の文化や思想を独特の視点で研究した哲学者で、文化勲章を受章した梅原猛さんが、12 日、肺炎のため亡くなりました。93 歳でした。

梅原猛さんは大正 14 年、仙台市に生まれ、京都大学の哲学科を卒業したあと哲学者としての道を歩みました。

その後、立命館大学や京都市立芸術大学で教授を務めて、日本の歴史や文化､思想を独特の視点で読み解いた多くの著作を発表し、その学問は「梅原日本学」と呼ばれました。

中でも、法隆寺の建立について独自の解釈をした「隠された十字架」や、万葉の歌人、柿本人麻呂の生涯について検証した「水底の歌」は、通説にとらわれない発想で大胆な仮説を展開し、話題となりました。

国際日本文化研究センターの設立にも力を尽くし、昭和 62 年から８年間、所長を務めたほか、平成９年から 15 年まで日本ペンクラブの会長を務めました。

１こうした功績が認められて平成４年に文化功労者に選ばれ､平成 11 年には文化勲章を受章しています。

その後も平成13年に日本古来の“ものづくり”の原点を見直し、高度な技能や技術を身につけることに重点を置こうと埼玉県に設立された「ものつくり大学」の初代総長を務めたほか、平成23年には東日本大震災の発生後に政府が設置した「復興構想会議」に参加し、自然との共存を重視する文明の在り方という視点から提言を行ってきました。
また、平成16年には作家の大江健三郎さんなどとともに、平和憲法の擁護を訴える「九条の会」の設立の呼びかけ人にもなりました。
さらに、梅原さんは、狂言や歌舞伎といった古典芸能の世界にも活動の場を広げました。梅原さんの原作をもとに歌舞伎俳優の市川猿之助さん、今の市川猿翁さんが台本や演出を手がけたスーパー歌舞伎「ヤマトタケル」は、斬新でわかりやすい演出と奥深い脚本で大評判となり、歌舞伎の活性化に貢献しました。平成25年には、古典芸能の「能」を現代風にアレンジしたスーパー能の作品「世阿弥」を制作しています。
親族によりますと、梅原さんは12日午後４時半ごろ、肺炎のため亡くなったということです。
田原総一朗さん「反戦の意思は受け継がないといけない」
哲学者の梅原猛さんは、みずからの戦争体験も踏まえ、一貫して戦争に反対する姿勢を貫いてきました。
10年近く前から親交があるジャーナリストの田原総一朗さん（84）は、梅原さんが亡くなったことについて、「非常にショックで、１つの時代が終わったと言える。梅原さんは、『なぜ日本が戦争を始めたのか、どこが間違っていたのか』を体験的に知っている人だった」と功績をしのんでいました。
そして、「最後に会ったのはおととしだったが、再び戦争を起こしてはならないということや、権力を疑うという姿勢を貫いていて、人間として尊敬していた。私たちの世代は戦争をあいまいに知っているだけなので、梅原さんの反戦という意思は私たちが受け継がないといけない」と話していました。
山折哲雄さん「ものに取りつかれたように仕事をしていた」
哲学者の梅原猛さんが亡くなったことについて、国際日本文化研究センターの元所長で、宗教学者の山折哲雄さん（87）は、「梅原さんとは40年ほど前に知り合ったが、自宅で部屋いっぱいに文献を広げ、ものに取りつかれたように仕事をしていた様子が大変印象に残っている。梅原さんは豪放で遠慮会釈のない批判精神で、内面的なものを考えて表現する世界を激しくも優しいことばで書き続けた珍しい人だ。戦後の日本人の哲学において、思想を捉える力が衰退する中で、梅原さんを失った意味は大きい。まるで平成の終わりという時代の節目を象徴するような亡くなり方だと思う。惜しい人を失った」と話していました。
梅原さん　「九条の会」の呼びかけ人も
梅原猛さんは戦時中の自身の体験を踏まえて、戦争の放棄をうたう憲法９条を守ろうと「九条の会」の呼びかけ人にも加わっていました。
「九条の会」は、梅原さんをはじめ、ノーベル賞作家の大江健三郎さんや作家の澤地久枝さんなど９人が呼びかけ人となって平成16年に発足しました。
発足した当時は自衛隊のイラク派遣が本格化していた頃で、その後も訴えを続け、「九条の会」によりますと、趣旨に賛同したグループは平成22年の時点で全国でおよそ7500に上るということです。
一方、９人の呼びかけ人のうち、この10年余りの間に作家の井上ひさしさんや評論家の鶴見俊輔さんなどが亡くなり、梅原さんの死去で７人が亡くなったことになります。
びかけ人の１人で作家の澤地久枝さんは、「梅原さんは表だって『九条の会』の活動に取り組むことはなかったが、戦時中の日本をよく知る方で、会の呼びかけ人に加わることで後押ししてくれたと思う。会の呼びかけ人は、大江健三郎さんと私の２人になりましたが、志は全国各地に広がっていて、梅原さんの思いがこの先も引き継がれていくことを願っています」と話していました。
瀬戸内寂聴さん「京都は宝を失った」
梅原猛さんが亡くなったことについて、親交の深い作家で僧侶の瀬戸内寂聴さんは、「梅原さんは私のことをお姉さん、お姉さんと呼ぶように、普通の友達よりも深いおつきあいでした。去年だったか私が病気で入退院を繰り返したときに梅原さんが見舞いに来ると電話をしてきたので、ありがたいけど女なのでみっともないところを見られたくないと断り、お互いゲラゲラと笑いあったのを覚えています」と振り返りました。
そして「梅原さんは、京都のあらゆる文化的な面を采配していて、哲学者でありながら政治的にも力のある方で、大変尊敬していました。梅原さんが亡くなったことは、私だけでなく、京都が宝を一つ失ったようなものです」と話していました。
「哲学の道」でも惜しむ声
数々の哲学者が散歩して思索にふけった京都市左京区の「哲学の道」周辺でも、梅原猛さんが亡くなったことを惜しむ声が聞かれました。
哲学の道を３日に１度は歩くという近所の80歳の男性は、梅原さんが平和憲法の擁護を訴える「九条の会」の発起人だったことや瀬戸内寂聴さんと親しかったことなどに触れ、「90歳近くになってもあれほど先進的な活動や研究をされた方はいないので、本当に惜しいです」と話していました。
また、近くに住む66歳の男性は、「京都では有名な人なので、残念です。私はそれほど哲学には詳しくないですが、時代の流れというか、また次からこの分野で新しい人が出てくることを期待したいです」と話していました。